

笹沢左保

乾いた空の流れ

文藝春秋新社

乾かわいた空そらの流ながれ・笹沢左保ささざわさほ◎

昭和三十八年七月二十日 発行

三八〇円

発行者 小野 詮 造

発行所 文藝春秋新社

印刷 図書印刷
製本 大口製本

落丁乱丁本はおとりかえ致します

目次

雲の葬列	乾いた空の流れ	廃墟の周囲	向島心中
5	77	143	199

乾
いた
た
空
の
流
れ

雲
の
葬
列

風に飛ばされて、少女の麦藁帽子は土手つぶちの水面から突き出た杭の間を漂っていた。母親は着物の裾をはしょって腰を折ると、川面に浮いている麦藁帽子に右手をのばした。その指先は、あと十センチで麦藁帽子に届きそうであった。

「お母さん。しっかり！」

土手の上で、少女は手を叩いて叫んだ。

その瞬間である。母親の身体は足許から崩れた。昨夜の強い雨で、川岸の土は柔かくなっていたのだ。母親は立ち上って重心を保とうとしたが、間に合わなかった。石柱でも倒すように、母親の身体は水の中へのめり込んだ。

川面が二つに割れて、水飛沫が土手に散った。母親の着物の白い縞模様が少女の目に触れただ

けで、かなり急な水の流れが川の中央へ溺れる者の身体を運んで行った。

水が激んでいるのは、土手つぶちだけであつた。昨夜の豪雨で川の水量は増していた。川が深いために、白い波頭こそ見えなかつたが、水面は巨大なベルトのように急速に移動していたのだ。少女は呆然と浮き沈みしながら遠ざかつて行く母親の姿を眺めていた。救いを求めるにも、あたりには人影が見当らなかつた。どうしたらいいのか、少女は咄嗟に判断出来なかつた。

家の近所なら、急を知らせに行くべき場所を思い浮かべられたかも知れない。だが、ここは少女の全く見知らぬ土地だつたのだ。

昨日の朝、少女の両親は激しく言い争いをした。そして母親は少女だけを連れて、逃げるように家を出て来たのである。

母親と少女は、昨夜はこの川の上にある小さな温泉場に一泊した。今朝になって、母親は家へ帰りましようと言って少女と二人、温泉場の旅館を出たのだつた。そして、バスの停留所へ向かう途中の、この出来事だつたのである。

お母さんが死ぬ——少女は、そのような緊迫感を覚えながら、土手の上を走り出した。少女はすぐ、土手の下を歩いている洋服姿の男を見つけた。男は、少女の父親と同じぐらいの年頃だつた。

《昨夜の小父さんだ！》

少女はそう気づいて、俄かに勇氣を得た。

男は昨夜、少女たちと同じ温泉場の旅館に泊っていた。母親と男は知り合いだったと見えて、少女が眠ってしまったあとで話し込んでいたようだった。

あの小父さんなら、きっとお母さんを助けてくれる——と、少女は直感した。少女はただ大声を上げて、男を呼んだ。男は土手を駆け上って来て、少女の指さす川面を人影が流れて行くのを認めると、もう夢中で走り出していた。

男は水中の母親と最も短距離にあると思われる地点から、上着も脱がずに川へ飛び込んだ。男が母親の身体を抱き寄せるのが、少女の目に映じた。母親が男に縋りついた。そのあたりだけで、水がはね、渦が躍った。男と母親は、まるで水中で格闘しているようであった。二人は絡み合ったまま水に沈んだ。男が岸に向かって、何か叫んだようである。一度だけ、五メートルほど先の川下で二人の頭が浮かび上がったが、すぐ見えなくなった。水中に没した男と母親の姿は、再び川面に現れようとはしなかった。川は悠長に、だが威圧感をもって流れ続けた。少女は土手の上に、泣くことも忘れて立ちつくしていた。

その日の夕方、迎えに来る父親を待つて、少女は川の近くの派出所にいた。警官に事情を訊かれて、少女は拙ない表現ながら詳しく説明した。しかし、なぜか少女の言葉は大人たちに通用しなかった。

「男はY市の市立病院の医師だね。小児科の権威だそうです。女はY市の第三小学校の教師の細君です。二人は幼な馴染で、二十前には恋愛関係にあったんだそうですよ。その後も、たまには

密会していたらしい噂です」

「男も女も昨夜は温泉の玉翠楼に泊り合わせています。子供はどうやらカムフラージュに連れて来たらしいですね。今朝も前後して旅館を出ているそうです」

「女は昨日の朝、亭主と大喧嘩して家を飛び出し、この温泉の玉翠楼へ来ているんです。男としまし合わせてあったことは、間違いありません。しかし、それにしても、子供の目の前で心中するなんて、残酷な話ですよ」

「女の方から仕掛けた無理心中ってことは考えられませんか？」

「いやあ、仏さんたちはお互いにしっかり抱き合っていましたし、覚悟の心中でしょうね」

「それに、女の家近所の人たちは、心中に違いないって口を揃えて言ってますしね」

「あの小児科の権威……惜しい人を死なせましたよ」

大人たちのこんな会話が、少女の耳に触れた。少女には、心中というこの意味は理解出来なかった。だが、それが決して賞められるべきことではないと、少女は漠然と嗅ぎとった。同時に、少女の説明を大人たちが信用していないのだと分かった。

「お母さんが最初に川に嵌まって、それを助けようとした小父さんも溺れてしまったのよ……」

少女は繰り返した。

「分かっている、分かっているよ」

と、警官が少女の頭を撫でてくれた。

少女を迎えに來た父親は、家に帰ってから庭の樗の木で首を吊って死んだ。少女は、全くの孤児になった。世間の人々は好奇心をもつて少女を見るか、そうでなければ冷淡に知らん顔をしていた。

三年後、少女は、引き取つて面倒を見てくれていた大工夫婦の許から姿を消した。『今に分かります』と書き置いてあつたきりで、その後の少女の行方は分からない。

月が鏡であつたなら——八戸善次郎は、そう口ずさんだ。二十六になる八戸善次郎は、勿論、この歌が流行した時代に記憶はない。だがそんな歌でも、口をついて出て来るくらい、今夜の彼は弾んでいた。

九月十四日、十六夜の月が、歩くにつれて樗の幹の向こう側を移動していた。善次郎は月で餅つきするウサギの、童話の挿絵を思い出し、影絵のバックに使われる大きな月を連想した。月をそのように見ることが出来るのは、氣持に余裕がある証拠だった。

實際、今夜の善次郎は大声を上げながら夜道を駈け出したくなるほど、生氣が漲っていた。心が豊かだった。誰に遠慮することもなく、思う存分空気を吸い込めるような氣がしたし、すれ違う見知らぬ人にも、今晚は、と声をかけたかった。

初めて、人間らしい生活をすることが許されたような解放感が、善次郎にあった。一年前までの暗い毎日が、まるで嘘のようである。

一年前までの善次郎は、悪い兄という十字架を背負っていた。兄の圭一郎は、善次郎にとって重すぎる荷物だった。圭一郎のお蔭で、善次郎はY県の県庁所在地であるY市の市役所吏員という職を失わなければならなかった。

圭一郎の最初の前科となった、婦女暴行傷害事件が、その原因だった。肉親が刑事事件を引き起した場合など、地方公務員はその職を辞さずにはいられなかった。圭一郎の犯した罪が、婦女暴行傷害という破廉恥な行為だったから尚更である。善次郎は、とても同僚たちの好奇と非難の視線に耐えきれはしなかった。善次郎は、高校を出てすぐ勤めた市役所吏員の職を捨てた。

その後、善次郎はまともな職を得ることは出来なかった。両親のない彼は、自分だけでも何とか食べて行かなければならなかった。だから、使ってくれるという口があれば、どんな職業であろうと彼は飛びついた。

しかし、犯罪者の弟を優遇して雇ってくれる篤志家は少なかった。大抵の雇用主は、兄のことを知ると即日、善次郎を誠にした。工員、クリーニング屋の店員、デパートの配達員、月賦家具店の集金人、風呂屋の手伝い、寿司屋の出前持ち、と市役所を辞めてからの三年間に彼は約十回も職を変えた。変えたのではなく、変えさせられたのである。

刑期を了えて刑務所を出て来た圭一郎は、三月もたたないうちに窃盗と強盗容疑で再び逮捕さ

れた。このことがあって、善次郎は珍しく半年間も続いた鉄工所の事務員という職を、フイにした。善次郎は絶望的になった。これでは一生、同じことを繰り返すようになるかも知れない、と思った。彼自身は、何一つ悪いことをしていないのだ。兄と弟という宿命的な絆が、善次郎に人並の人生を送らせようとしないのである。

善次郎は兄と絶縁したかった。そうでなければ、東京へでも行って過去も係累も問わない人々の中で生きようかと考えた。だが、その決心もつかないままに、彼は今度はY市内を貫く主幹道路際に店を出している食堂に職を見つけた。

その食堂は、すぐ脇の空地にトラックの駐車場を持っていた。店の前の主幹道路は東海道路で、長距離短距離の区別なく輸送トラックが、二十四時間中往来していた。『大衆食堂正直屋』は、八十円定食、運転手さんご苦労さま、家庭の味、井もの五十円より、などといった看板をかがけて、輸送トラックの運転手を相手に商売する『めし屋』であった。

正直屋は二十四時間営業で、かなり繁昌していた。給仕の女の子たちが揃って若く、言葉つきは乱暴でもなかなか情があって、運転手仲間には評判がよかった。食堂の横の空地は、いつも駐車しているトラックでいっぱいだった。食堂の経営者は、トラック運転手に肉体的精神的な休養を与え、交通事故を未然に防いだという理由で県公安委員会から表彰されたこともある。

善次郎は、この食堂のコックの手伝いに雇われた。コックの手伝いといっても、料理を作るわけではない。昼夜交替でカマドの火を燃やし続けるのが、彼の仕事だった。五升炊きの釜の飯は、

炊き上がるそばから、見る間に平らげられて行く。二つのカマドの火が絶えず燃えていなければ、運転手たちの食欲を充たすことは出来なかった。

仕事は単調で辛かったが、善次郎はこの職についてことに満足していた。ここで働いている人たちは、言葉は荒っぽいが、事務屋にはない連帯感が強く、仲間への人情が厚かった。飾り気はないが実がある、という連中だった。

店では、活気に溢れた運転手たちの高笑いや饒舌が絶え間ない。ジメジメした陰湿なものが、この正直屋の屋根の下には微塵もなかった。善次郎は、ここで働いている限り、今までのように孤立感を味わうようなこともなくすんだ。彼は、圭一郎のことも忘れがちであった。

そして、善次郎が平林千秋と知り合ったのも、この正直屋で働くようになったからである。千秋は正直屋の給仕女のうちの一人であった。千秋は、よく働く娘だった。この時の善次郎は二十三歳で、千秋は三つ下の二十であった。千秋は、決して美人という顔立ちではなかった。色も白くなかったし、肌のキメも細かい方ではない。ただ、マスクをかけたら印象的な容貌になるかも知れないと思わせるほど、睫の長く揃った目だけが十人並以上だった。身体つきは小柄で、あまり均斉のとれた肢体とは言えなかったが、胸と腰がすっかり発達していて、運転手たちが冷やかし半分に手を触れたりした。

千秋はあまり、自分の生い立ちなどについて話したがらなかった。生来が無口なのかも知れないが、過去の境遇が自慢出来るものではないということもあったらしい。